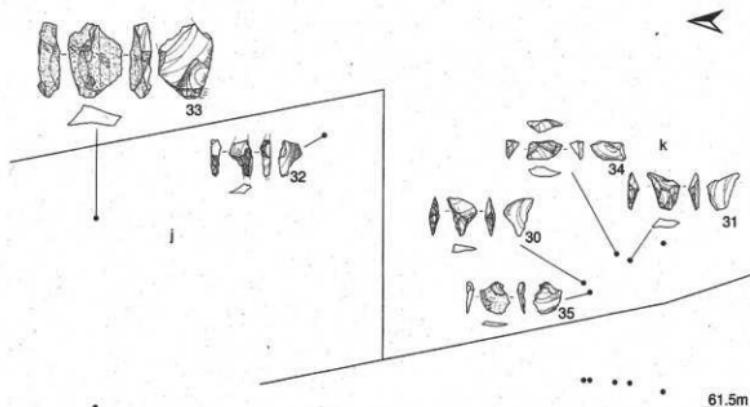


国見町文化財調査報告書(概報) 第6集

いし はら  
**石原遺跡Ⅱ**  
Ishihara

—国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—



12区j・k第VI f層石器群(本文5・6頁)(1/40)

2005

長崎県国見町教育委員会



## 発行にあたって

このたび平成14年度・平成15年度に実施しました国見中部地区圃場整備事業に伴う石原遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

石原遺跡は、国見町のほぼ中央部に位置し、両脇を河川に挟まれたなだらかな丘陵上に所在します。

南側には雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

これまでの調査において遺跡からは、旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており、その一部はすでに報告（石原遺跡・矢房遺跡2003）済みであります。今概報では石原遺跡12区より検出された旧石器時代の遺物を報告いたします。当地区からは4層に細分される旧石器時代石器群が検出されており、県内でもきわめて稀な資料であります。点数は少ないながら分布や石材に違いが見受けられ、また、遺跡西側に流れる土黒西川の流れと共に暮す祖先たちの生活が垣間見えます。今報告では火山灰分析により、指標火山灰である「姶良Tn火山灰」も検出されており、より緻密な石器群の変遷を捉えることができたと考えております。

国見町の縁豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。

本町では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本町にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課の皆様のご指導に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成17年3月31日

長崎県国見町教育委員会  
教育長 原 宮之

## 例　　言

1. 本報告は2003年（平成14年度～平成15年度）に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町に所在する石原遺跡の緊急発掘調査の報告（概報）である。

2. 調査は国見町教育委員会が担当した。

発掘調査は下記の期間実施した。

2003年3月12日～2003年6月10日（平成14・15年度） 石原12区～18区、26区～28区

3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教　育　長	原　　宮之
	同	教　育　次　長	吉田　正昭
	同	社会教育係長	柴崎　孝光
調査担当	同	文化財調査員	竹中　哲朗
	同	社会教育係	辻田　直人

4. 現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・東文子・林繁美・竹中・辻田が行い、遺物の実測・製図は早稲田一美・辻田が行った。写真は現地調査を竹中・辻田が、遺物写真は辻田が行った。

5. 遺構実測の一部は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6. 自然科学分析は（株）古環境研究所に委託した。

7. 空中写真撮影業務は（株）九州文化財研究所に委託した。

8. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は国見町埋蔵文化財整理室で保管している。

9. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は旧日本測地系による。

10. 発掘調査にいたる経緯、国見町の概要、地理的・歴史的環境などは国見町文化財調査報告書第3集「石原遺跡・矢房遺跡」において報告済みでありそちらを参照願いたい。

11. 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。長岡信治（長崎大学教育学部助教授）、早田勉（古環境研究所）、萩原博文（平戸市教育委員会）、川道寛（長崎県学芸文化課）、渡邊康行（埋蔵文化財サポートシステム）、宇土靖之（長崎県有明町総合文化会館）、九州旧石器文化研究会、福岡旧石器文化研究会、長崎県教育委員会、（株）野田建設（順不同）

12. 本書の執筆・編集は辻田直人による。

# 目 次

巻頭図版

発刊にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯 ..... p 1

第1節 発掘調査にいたる経緯

第2節 発掘調査の方法及び経過

第2章 基本土層 ..... p 1

第1節 層 位

第3章 旧石器時代 ..... p 3

第1節 概 要

第2節 第VI f 層石器群

第3節 第VI d 層石器群

第4節 第VI c 層石器群

第5節 第VI b 層石器群

第6節 その他

第4章 自然科学分析 ..... p 14

第1節 火山灰分析

第5章 総 括 ..... p 25

第1節 概 要

第2節 出土石器の検討

第3節 まとめ

## 挿 図 目 次

第1図 石原遺跡位置図(1/20,000)	
第2図 調査区配置図	
第3図 調査地点の断面図 (断面図の場所は第5図に指示).....	1
第4図 基本土層.....	2
第5図 12区及び19区・20区位置図(1/1,000) .....	3
第6図 12区東壁土層図及び石器群・遺構検出 位置図(1/160) .....	4
第7図 12区I(エル)第VI f層P-1(1/20) .....	5
第8図 12区j・k第VI f層出土遺物分布図 (1/40).....	5
第9図 12区j・k第VI f層出土石器(2/3) .....	6
第10図 12区I(エル)第VI d層出土遺物分布図 (1/40).....	7
第11図 12区I(エル)第VI d層出土石器(2/3) .....	8
第12図 12区m第VI c層中疊群及び出土遺物 分布図(1/40).....	9
第13図 12区m第VI c層出土石器(2/3) .....	9
第14図 12区g・i～m第VI b層出土遺物分布 図(1/80).....	10
第15図 12区g・i～m第VI b層出土石器(2/3) .....	11
第16図 12区h・SK01(1/20) .....	12
第17図 12区h・SK01出土石器(2/3) .....	12
第18図 19・20区(a～e)第VI b層出土遺物分布 図(1/160) .....	25
第19図 19・20区(a～e)出土旧石器時代の石器 (1/3) .....	25
第20図 12区g・i～m出土遺物分布図(1/80) .....	26
第21図 19・20区及び12区各層石器群の分布状 況(1/400) .....	27
第22図 12区層別出土石器(1/3) .....	28

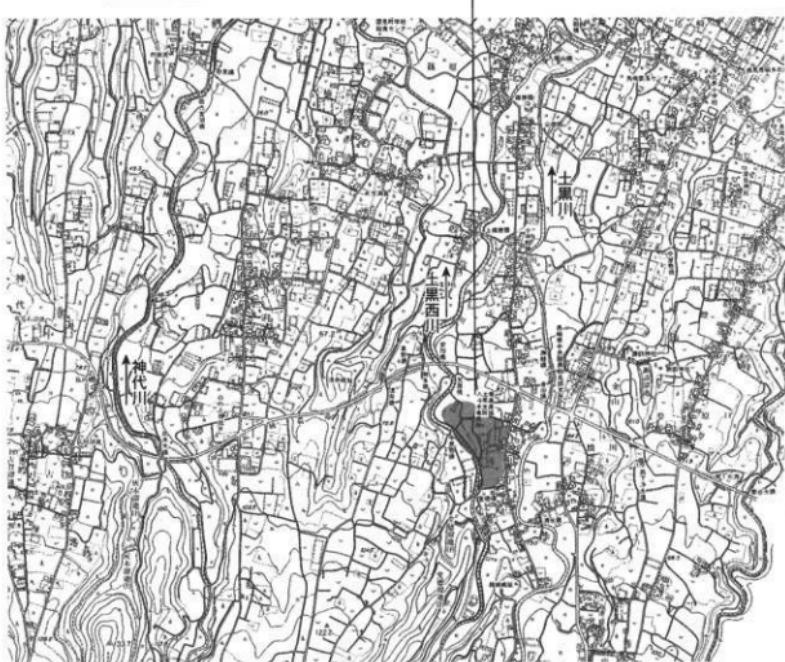
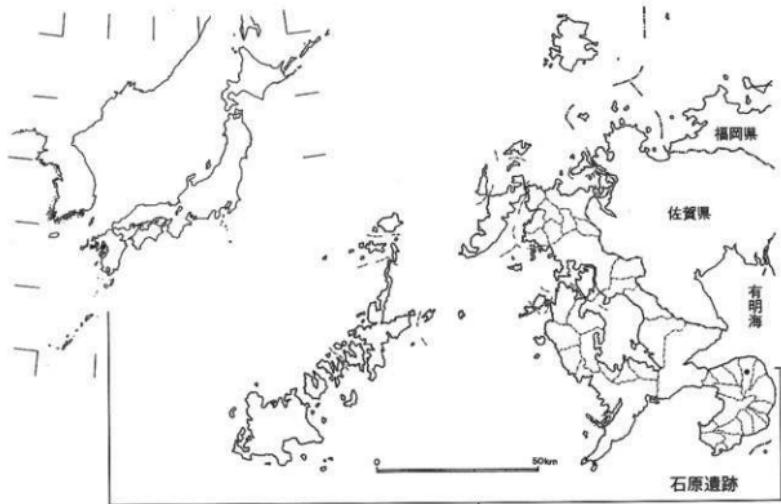
## 表 目 次

第1表 旧石器時代出土石器計測表.....	13
-----------------------	----

## 図版目次

- 卷頭図版① 遺跡上空より有明海をのぞむ 石原12区m土層（東壁・第VI d層まで）
- 卷頭図版② 石原12区及び土黒西川 調査風景（背後は平成新山） 12区k第VI f層調査風景  
第VI f層石器群  
(1/1:本文5・6頁)

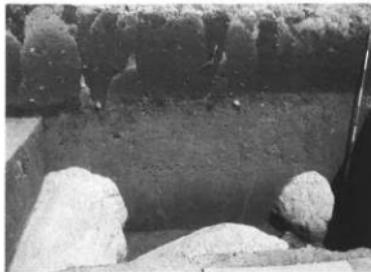
図版1 遺跡上空写真(昭和35年度国土地理院) .....	36	12区m第VI c層礫群(南より:第12図) アミなし) .....	38
図版2 12区調査風景(南より) .....	37	図版4 12区m第VI c層礫群(第12図アミかけ) .....	39
12区調査風景(左側が土黒西川) .....	37	12区m第VI b層遺物 .....	39
12区m調査風景(第VI b層) .....	37	12区I(エル)第VI d層遺物 .....	39
12区k北西隅石器(第15図49) .....	37	12区I(エル)第VI d層遺物(第11図36) .....	39
12区h・SK01検出状況 .....	37	12区k第VI f層遺物(第9図) .....	39
12区h・SK01半裁状況 .....	37	12区k第VI f層遺物(第9図30-35) .....	39
12区h・SK01完掘状況 .....	37	12区j完掘状況 .....	39
12区h・SK01完掘と東側土層 .....	37	12区k第VI f層遺物と西側土層 .....	39
図版3 12区I(エル)第VI f層P-1 .....	38	図版5 第VI f層遺物(1/1:本文6頁) .....	40
12区I(エル)第VI f層P-1 .....	38	第VI d層遺物(1/1:本文8頁) .....	40
12区I(エル)第VI f層P-1 .....	38	図版6 第VI c層遺物(1/1:本文9頁) .....	41
12区I(エル)第VI f層P-1半裁 .....	38	第VI b層遺物(1/1:本文11頁) .....	41
12区I(エル)第VI f層P-1完掘 .....	38	SK01出土石器(1/1:本文12頁) .....	41
12区I(エル)第VI f層P-1と東側土層 .....	38		
12区m第VI c層礫群(北より:第12図) アミなし) .....	38		



第1図 石原遺跡位置図(1/20,000)



12区 † サンプリング状況



12区 J 土層堆積状況



13区深堀トレンチ土層堆積状況



17区サンプリング状況（発掘担当者）



28区土層堆積状況  
(中央方形の白色土坑が深堀トレンチ)

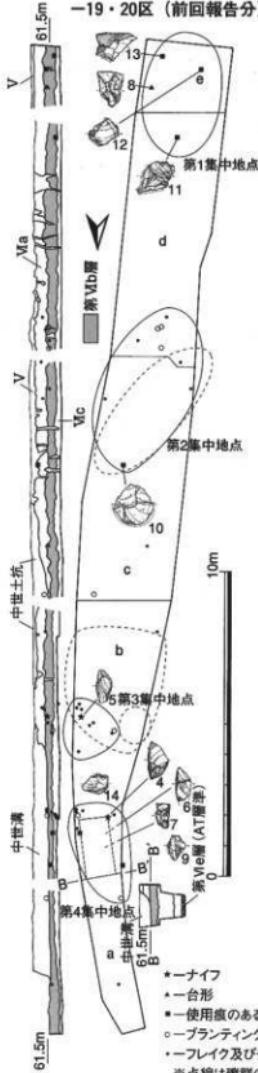


28区深堀トレンチ土層堆積状況（下層）

# 第5章 総括

## 第1節 概要

—19・20区(前回報告分)の状況—



第18図 19・20区(a~e)第VI b層  
出土遺物分布図(1/160)

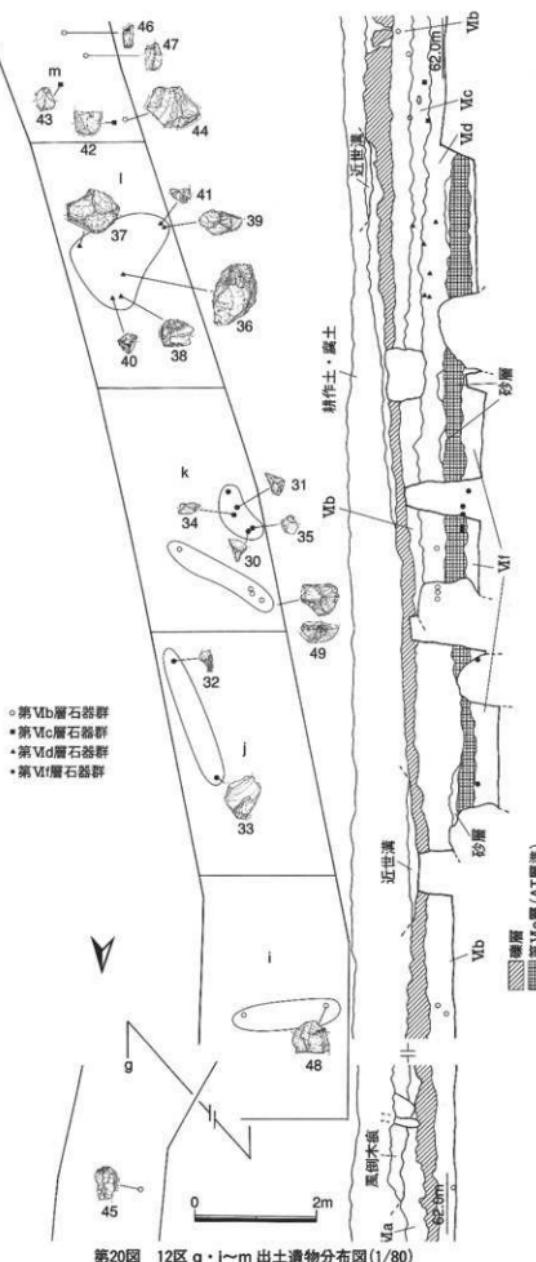
25 第5章

辻田・竹中2003で報告済みの19・20区について概観する。第18図は前回報告時に掲載できなかった土層と遺物垂直分布の対比である。19・20区はa~eに区分して調査を行っている。土層図に見られるように全面にわたって第VI b層が検出されており、そこを中心に石器群や砾群が検出されている。第18図の平面分布と垂直分布のドットは石器類のみで、砾群(点線の範囲)は掲載していない。調査は一部第VI e層まで行っているが概ね第VI d層上面までである。今回報告分と同様に農道拡幅に伴う調査であり、全ての地区で工事深度はクリアしている。よって、さらに下層で石器群の検出される可能性はある。調査では4箇所の集中地点を検出しており、石材や器種によりそれぞれ偏りが見られることが確認されている。第1・第4集中地点はトゥールや使用痕のある剥片が集中し石器の使用に関する場所、第2・第3集中地点はチップやプランティングチップ、また、角閃石安山岩の砾群が検出されており、石器製作にかかる場所もしくは不要物の廃棄場所とも考えられる。石材も黒曜石が数種類に分類(肉眼観察)でき、その分布から石器の持ち出し・搬入の様子がうかがえる。bの深掘トレンチでは第VI e層まで検出しているが、今回報告の12区とほぼ同様の堆積である。ただ1点、12区で第VI b層上に検出された砾層の堆積が見られ



第19図 19・20区(a~e)出土  
旧石器時代の石器(1/3)

ないが、19・20区と12区の第VI b層以下は土色・土質共にまったく同様であり同時に堆積した土層と考えられる。よって、19・20区の石器群と12区の第VI b層石器群は同時期のものとして捉えられる。12区は火山灰分析を実施していないが、今回の分析データをそのまま活用できると考えられる。



第20図 12区 g・i~m 出土遺物分布図(1/80)

### -12区の状況-

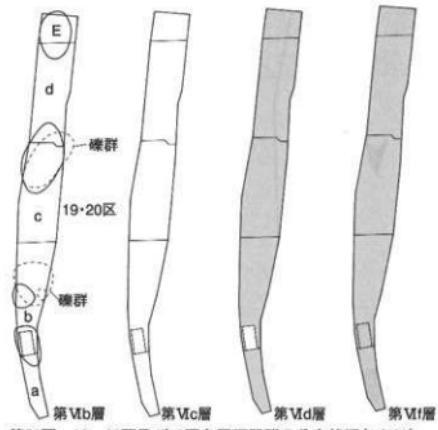
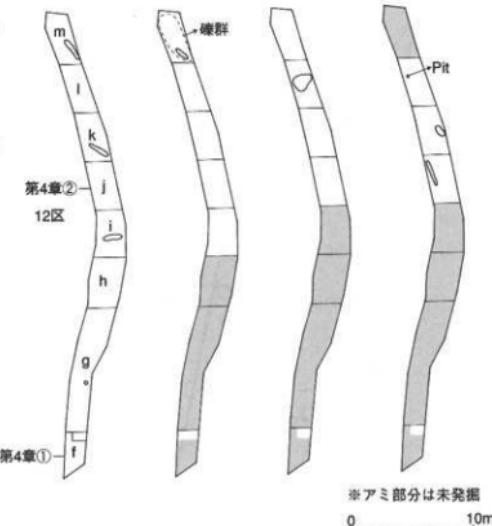
左図は12区の土層と遺物垂直分布の対比である。調査区の東壁(平面分布図左側)の土層図との対比であり、西側寄りに遺物の集中が見られるkでは本来の土層範囲の中に収まっているないが、土層の傾斜によるものである。いずれの石器群も平面分布・垂直分布ともに非常にまとまりのある状況がみてとれる。12区は19・20区に比べると調査区の幅が2/3ほどしかなく、非常に細長い調査区である。遺物の出土数が19・20区に比べて少ないが、第VI b層の出土状況を見るにつき、調査区の幅に起因しているとも考えられる。これまでにも述べたが、12区の石器群は各土層で時間差が想定される。その根拠としてまず平面分布・垂直分布とともに非常にまとまりが見られる、出土遺物に移動による摩滅などが見られない、各土層の石器群ごとに石材や器種の偏りが見られる、等が考えられよう。特にm第VI c層石器群では2時期の礫群が検出されており、より細かい時間幅での人類の活動の痕跡を捉えたものであろう。また、石器群はほとんどがトゥールや使用痕のある剥片である第VI f層石器群・第VI d層石器群と、残核やチップなどの碎片も多く見られ石器製作の痕跡が残る第VI b層石器群とでは石器組成の違いがみられる。このことは遺跡の「場の利用」の差異を表しているのではないだろうか。もちろん遺跡全体を調査できているわけではないので断定はできないが、19・20区の調査結果からも、時期によって遺跡内での活動内容に変化が読み取れるであろう。石原12区では石器組成などの物質的な変化だけでなく、遺跡内での人類活動内容の変移もみる事ができる良好なデータを提供してくれている。

## 第2節 出土石器の検討

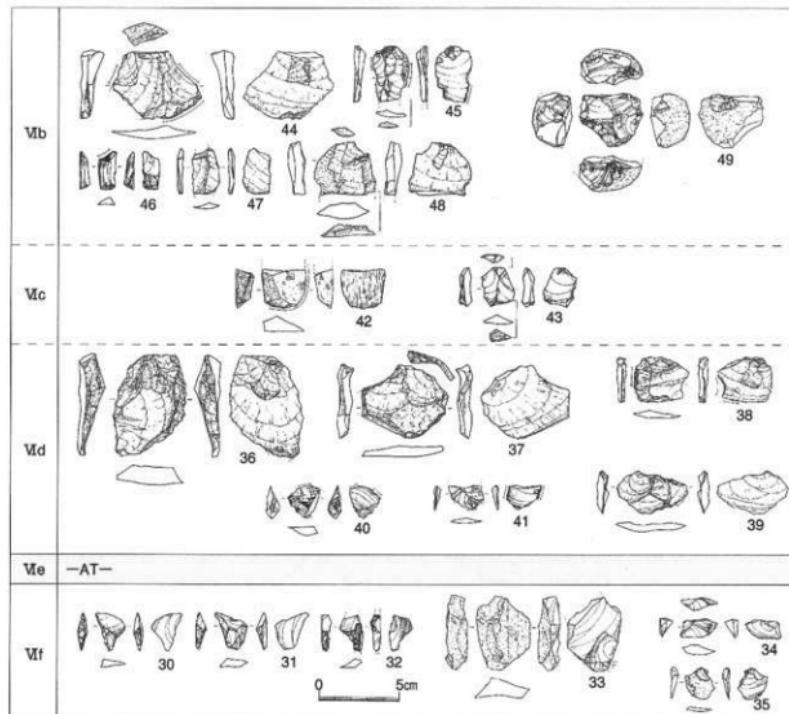
### 一各層石器群の変遷—

これまで見てきたように石原遺跡19・20区及び12区では4層に分かれて石器群が検出されている。下図(第21図)は各層石器群の検出地点をあらわしたものである。アミ部分は未掲範囲であり石器群の埋蔵されている可能性もあるが、19・20区及び12区にかけての全面からまとまりをもって検出されている第VI b層石器群に比べると、下位の石器群は出土点数・出土地点共に非常に少ない。時期ごとの「場の利用」の差異を表しているものと考えられる。また、第VI b層石器群は19・20区に分布の中心がみられ、出土遺物の内容も下位の石器群と大きな違いが見られる。下位の石器群は12区k付近にその中心があるが、出土遺物の内容から、石器製作の痕跡があまり感じられない。それに対して、第VI b層石器群はトゥール以外の剥片・碎片類が豊富にあり、石材獲得後、この地において石器の製作から使用までの一連の活動を行っていたと考えられる。第VI f層石器群～第VI c層石器群の出土する12区k付近と第VI b層石器群の分布の中心がある19・20区は50m程度の距離であり、石器出土地点の移動は西側を流れる土黒西川の流れと密接に関わるものと推測されよう。

石器群の埋蔵されている土層については河川の影響を受けながら堆積してきたものと報告してきた。石材の偏りや、分布の集中などを根拠に石器群の時期差や一括性を述べてきたが、19・20区北側(図では下・第2図)の21区、また、12区の南側(図では上・第2図)の13区～16区では第VI b層から石器の検出は見られない。特に13区～16区は12区の第VI b層石器群の検出を受けて、同様に4mグリッドで旧石器の検出を狙って調査をしており、調査深度も第VI d層付近まで達している。第VI b層以下の土層は、20区～16区(第2図参照)の全面(150mの範囲)に検出されているが、報告してきたとおり19・20区及び12区(80mの範囲)でしか石器は検出されていない。このことも、今回報告の石器群の時期差・一括性の根拠となろう。



第21図 19・20区及び12区各層石器群の分布状況(1/400)



第22図 12区層別出土石器(1/3)

#### 一各層石器群の内容一

上図（第22図）は12区各層別の出土石器である。各層毎に特徴を見て行くこととする。

**第VI f層：**総出土点数7点（1点は細片のため未掲載）全てが黒曜石である。30のみ青灰色黒曜石製で、それ以外は同一母岩（肉眼観察）と考えられる黒色黒曜石製である。不定形の剥片を素材とする小型のナイフ形石器や台形石器を特徴とする石器群である。また、ピット状遺構も検出されている。

**第VI d層：**総出土点数6点全てを掲載している。安山岩製の剥片石器及び安山岩・黒色黒曜石の使用痕を有する石器群である。器種は搔器・削器で、使用痕を有する剥片も搔器状の使用が認められる。剥片剥離は第VI f層と同様に不定形の剥片を素材とする剥離技術が見られ、第VI f層と共に通る。

**第VI c層：**石器の出土は2点にとどまるが、重複する礫群が検出されている。43は青灰色黒曜石で、背面の剥離痕から不定形の剥片を剥離する剥離技術が見られる。重複する礫群は大きさが人頭大の角閃石安山岩（在地）も含まれており、2時期にわたるものと考えられる。第VI f層から第VI b層においてこのような大きさの礫が検出されることには皆無であり、人為的な痕跡と理解している。よって、第VI c層堆積中には少なくとも2回の人的活動ができる期間が存在したことが推測される。

**第VI b層：**総出土点数12点のうち6点を掲載（残りは細片のため未掲載）している。黒色黒曜石と安山岩の2種類が見られるが、チップ類には黒色黒曜石が多い。19・20区の成果からも、やはり黒色黒曜石主体の様相がみられる。剥片剥離技術では45の縦長剥片の存在により、典型的な縦長剥片剥離技術が新たに加わる。49のような打面転位を繰り返す残核や、19・20区出土のナイフ形石器など、下層の石器群と同様の不定形の剥片を剥離する剥離技術も主たるものとして継続されている。

### 第3節 まとめ

#### 一はじめにー

前回の報告時（辻田・竹中2003）にも記述したが、今回報告の旧石器時代遺物包含層である第VI b～VI f層は非常に硬質の土層であり、発掘に使用したネジリ鎌（草取り）の刃は半日ともたない。したがって、多少の微細なチップ類の見逃しはあるかもしれないが、そのせいで19・20区（辻田・竹中2003）に比べて12区出土の石器の数が少なかったり、第VI c層以下の石器にチップ類が少なかったりといったことはない。前回の19・20区の調査成果と今回の12区の調査成果には、地形や地質的な要因で発掘成果に偏りがあるとは考えられず、石器の出土状況は遺跡に埋蔵されている旧石器時代文化層の様相を同様のレベルで反映していると考えている。

#### 一火山灰分析の結果からー

12区では2箇所で火山灰分析（第4章）を行っている。12区fと12区jである。いずれの地点も土層の堆積状況は同様で分析結果も同様の結果を得ており、第VI e層においてAT火山灰に由来する火山ガラスのピークが検出されている。第VI f層においても微量ながらAT火山灰に由来する火山ガラスが検出されており、第4章自然科学分析では「・・・上方からの擾乱作用などを受けている可能性も完全には否定できない。石器の層位については、より多くの地点での分析に考古学的な遺物の検討も加え、総合的に判断されたい。」（17頁5. 考察）と報告されている。今章の検討により第VI f層石器群についてはAT下位の石器群として理解しているが、今後もより多くの地点で検証を行わなければならないことは言うまでもない。遺物の出土状況から見ると、AT火山灰に由来する火山ガラスのピークが存在する第VI e層からはまったく遺物の出土がなく、人類活動の断絶期として捉えると、第VI e層堆積時がAT火山灰降灰期となるのが都合の良い解釈となろうか。12区fと12区jの火山ガラス比ダイヤグラムを見ると、第VI e層をピークとして第VI b層に至るまで、AT火山灰に由来すると考えられる火山ガラスが検出されている。その量は上層になるに従い徐々に減少していく。これはAT火山灰堆積後の土黒西川の作用によって運ばれた二次的な堆積と考えられよう。第3章第1節でも述べたが、第VI e層は一連の堆積層の中でも時間的な隔離期と捉えられる。これに対して第VI d～VI b層は比較的短時間（時間幅のスケールは判断できないが）の堆積が考えられる（同じく第3章第1節）。このことは先に述べた火山ガラス比ダイヤグラムの結果とも符合するのではないかろうか。すなわち、第VI e層堆積時に降灰したAT火山灰は土黒西川の作用で流失し再堆積するが、当然その量を減少させながらの流失となり、その期間中に第VI d～VI b層が堆積した、と考えられないであろうか。土層堆積状況から見る各層の時期差・時間幅は火山灰分析の結果からも追認できるのではないかろうか。

#### 一各層石器群の内容と土層の対比ー

火山灰分析結果と土層の観察状況から、上記のような結論が考えられよう。ここでは、出土石器からなどどのような事が言及できるのか考えてみたい。第5章第2節において各石器群の特徴をまとめている。その結果から、各層石器群において違いが見られる。まず石材について、第VI f層石器群は黒曜石のみの構成となっているのに対し、第VI d層石器群では安山岩が主体。第VI b層石器群では黒曜石を主体しながらも安山岩系の石器も使用されている。次に器種構成について見ると、第VI f層石器群は小型の台形石器が主体。第VI d層石器群は搔器・削器。第VI b層ではナイフ形石器がそれぞれ主体となっている。剥片剥離技術については、第VI f層石器群から第VI d層石器群まで一様に不定形剥片を素材とする剥片剥離技術が主体となるが、第VI b層石器群ではそれに縦長剥片剥離技術が追加される。また、石材を細かく見ると、第VI d層石器群の36・37（8頁）と第VI b層石器群の44（11頁）は石材及び剥片剥離等ほとんど同様のもので、一見同一母岩資料とも見受けられる。47（11頁）も同

様の石材である。第VI d層石器群と第VI b層石器群の間には2時期に渡る疊群が検出された第VI c層石器群があり、ある程度の時間差があるのは確実であろう。また、第VI b層石器群49（11頁）の残核は、第VI f層石器群の台形石器・ナイフ形石器の素材剥片を剥離するものとして過不足ない資料であり、同一層で検出されれば石核とそこから剥離された剥片石器とすることも可能であろう。このように、12区出土の石器群は石材・器種構成・剥片剥離技術のそれぞれが相連しながらも密接に結びついている様子がうかがえる。第VI e層は時間的な隔絶別と先述した。このことは火山灰分析結果とも符合しよう。また、第VI c層石器群には二時期の疊群が存在し、そこにある程度の時間幅が存在しよう。これらのことから、第VI f層石器群・第VI d層石器群・第VI b層石器群の間には時間的な差が確実に存在しているようだが、剥片剥離技術の断絶や石材選択の極端な変化が発生しうるほどの時期差ではないと考えられる。特に第VI d～VI b層までは火山灰分析結果や土層の特徴などから大きな時間差を考えることは難しいのではなかろうか。したがって、石原遺跡19・20区及び12区の石器群はAT火山灰降灰時期を境目としてその前後の石器群の様相を表しているのではなかろうか。もちろん、これまでにも述べているとおり、狭小な調査面積であり各層石器群の全体の様相が判明しているわけではない、ということを念頭においておかねばならないことは言うまでもない。

#### 一他地域の石器群との対比一

上記の検討において、石原遺跡ではAT火山灰降灰時期を境目として比較的時期の近い石器群が検出されている、ということになる。AT火山灰降灰前の他地域の石器群と比較を試みたい。何度も述べたが、狭小な面積の調査であり石器群全体の様相が判明しているとは言い難く、その対比についても細部にわたるものではないということを最初に申し添えておく。石原遺跡出土のAT火山灰降灰前石器群（第VI f層石器群）の特徴は大きく2つ。石材は黒曜石のみ、小型の台形石器が特徴的な器種構成となる。近隣地域で同様の事例を探してみると、熊本県小国町耳切遺跡（村崎1999）や熊本県松橋町曲野遺跡（江本1984）などが上げられよう。黒曜石を主体とした小型の台形石器群が特徴の遺跡である。また、広島県西ががら遺跡においても石材は異なる（安山岩）ものの小型の台形石器を主体とした石器群の報告が見られるなど、広範囲において同様の石器群の発見がなされている。前述した土層との対比や火山灰分析結果との検討もふくめて、石原遺跡12区第VI f層石器群の位置付けが、AT下位の石器群と設定するに足るものであろう。第VI f層石器群の台形石器は耳切遺跡や曲野遺跡のものと比べると丁寧なプランティング加工が施されており、AT下位石器群のなかでもより後出するものと捉えられるであろう。

#### 一おわりに一

石原遺跡では数度にわたる調査において多くの旧石器時代遺物が検出されている。辻田・竹中2003（第3章）では後期旧石器時代初頭まで遡る可能性のある石器の報告も行っている。また、近隣の国見町松尾遺跡（辻田2002）や布津町大崎鼻遺跡（土橋2001）でも同様の報告がなされている。しかしながら層位的な検出には恵まれておらず、あくまでも石器の形態や石材、風化面などの二次的な要素にその根拠を負うものであった。石原遺跡や松尾遺跡の圃場整備事業に伴う発掘調査は平成15年度までにすべて終了しており、今後その追認作業を行うことは困難といわざるをえない。しかしながら今回報告した石器群については、層位的な検出状況に恵まれており、AT火山灰との対比や他地域との比較など、より広域的な位置付けが可能な資料である。島原半島では近年、旧石器時代～縄文時代草創期遺物の層位的検出事例やそれに伴うであろう遺構（ピット）の検出（辻田・竹中2004）も増えてきている。これまでにも百花台遺跡群の調査（麻生・白石1976、田川他1988・1994、松藤1994、川道2004）において多くの旧石器時代文化の成果が見られたが、その範囲を大きく拡大する事例が相次い

でいる。また、旧石器時代文化層検出の有る無しにかかわらず、雲仙山麓の土層に対する自然科学分析も盛んに行われ始めている（長岡・田島1998、古門他2001、土橋2001、遠部他2003、辻田・竹中2003・2004）。その中では雲仙起源の火山灰や火山噴出物の検出も見られており（辻田・竹中2004、土橋2001）AT火山灰などの広域火山灰との併用により細かな時期区分の設定が行える可能性もある。今回の調査成果の特徴は、遺物の検出された土層がこれまでの島原半島の土層堆積とは大きく異なるところにあろう。最も一般的な堆積を示す百花台遺跡群では、第2層に赤褐色の縄文時代包含層（K-Ah）、第3層はやわらかい黒色土（百花台型台形石器）、第4層は硬質の通称「カシノミ層」と呼ばれる疊石原火碎流に伴う堆積物、第5層は黒色土（ナイフ形石器）、第6層は硬質のAT火山灰降灰層準、第7層は黒色土のいわゆる暗色帶、第8層が分厚い黄色土が堆積し、さらに下層は雲仙普賢岳起源の角閃石安山岩の疊層となっている。これまでに長崎県教育委員会の調査や同志社大学の調査などにおいて良好な旧石器時代文化層が検出されている。汎日本列島的にみられるような黒色帶及びその下の黄色土、K-AhやAT火山灰の検出など広域的な編年の対比に耐えうることが可能となっている。これに対し石原遺跡の土層はこれまで述べてきたように非常に短い期間に堆積した土層である。判りやすく言うと、百花台遺跡群では最下層の第8層から地表面までの2～3m程の土層の堆積が少なくとも3万年はかかるに對し、石原遺跡はその半分ほどの堆積であるが、AT降灰時期前後と非常に短く限られた期間の土層であると言えるであろう。百花台遺跡群では第6層にAT火山灰降灰期があり、石原遺跡は百花台遺跡第6層堆積時の一地域の一様相を端的に表していると考えられる。

今回、土層の堆積状況や火山灰分析結果との対比、出土石器の内容、他地域との対比などから石原遺跡の石器群の位置付けをおこなった。全て辻棲が合うような感覚があるが、特に土層堆積などは1箇所の調査と分析・検討ではそれが正しい判断となるかは疑問である。土層堆積の状況と火山灰分析結果の対比については私見の部分が多く、1つの可能性を示しているに過ぎないであろう。今回のよき調査事例が今後増加し、願わくば同様の結果となることを期待したい。

#### 補足1—(自然科学分析について)

今回の報告では、縄文時代の土器片が多く検出された17・18区の概要についても掲載する予定であったが、都合により当該地区的自然科学分析のみの報告となつた。17・18区第4層からは縄文時代中期西唐津式土器の集中的な出土が見られる。また、西唐津式土器包含層に覆われるよう検出された溝状造模も検出されている。今後報告時に今回の自然科学分析を参考にしていただきたい。また、13区深堀地点と28区の自然科学分析についても分析結果だけの掲載となってしまっている。13区については12区の旧石器時代遺物出土地区のすぐ南側である。第VIa層や第VIb層は検出されているがその下位は大きく土層堆積が異なっている。砂礫や粘質土の堆積が重なり、水流によって運ばれた堆積物である。調査区の中でもより土黒西川に近い地点であり、ほんの少し調査区がすれば大きく土層の堆積が変わることが判る。28区については耕作土を除去すると晩期の包含層が薄く堆積しており、石原遺跡の大部分の調査区に見られる土層の堆積である。しかしながら下層はやはり土黒西川の影響を受けた土層堆積となる。19・20区・12区や13区とは土層の堆積が異なり、同じ河川沿いでも地点が変われば土層堆積が大きく変化する様子が捉えられよう。

第4章自然科学分析の中で、「・ガラス質岩片については、ATより下位にある・」(21頁5. 考察)との記載があるが、このガラス質岩片は島原半島で暗色帶の下位に見られる黄色土の中に包含されている径2cm程の黒曜石岩片の可能性が高く、人為的に作られた石器の可能性は低いと考えられる。相当層まで達する深度の調査を行ったが、石器群の検出は見られない。24頁の写真を見ると当地区は土黒西川に向かって土層の傾斜が見られる。土層堆積状況から見ると河川の影響を強く受けているようで、19・20区及び12区に比べると居住空間としては不適な場所であったであろう。分析者とも検討した結果この場で誤認を招かないよう報告しておく。以上3地点(13区・17区・28区)の自然科学分析に伴う調査区の状況や図面等の掲載については、今後の報告時に行いたいと考えている。

#### 補足2—(前回報告分の訂正)

辻田・竹中2003において報告した石器群の中で、報告書13頁第13図8の石器(今概報25頁19図8)については原の辻型台形石器と報告しているが、今回の調査も含めて、素材獲得の段階から原の辻型台形石器の製

作を意図するような剥片剥離を示す資料は検出されなかった。したがっていわゆる原の让型台形石器に形は似ているが、該期の石器とは当てはまらないと考えられる。この場で訂正しておく。

### 補足3－（カシノミ層について）

「第5章第3節まとめ」の百花台遺跡群層序説明の中で、第4層に通称「カシノミ層」と呼ばれる硬質の土層がある。この「カシノミ層」とは、島原半島在住の農業従事者の方々が、畑の耕作の際、非常に硬質で農作物の育成に適さない土壤のことをそう呼んでいた。国見町周辺において「カシノミ層」と呼ばれている土層は、雲仙普賢岳起源の輝石原火砕流に伴う噴出物（長岡・田島1998ほか）とされており、約1万4千年前と1万9千年前の年代が測定されている。百花台遺跡群を中心とする島原半島北側地域に広く分布しております。発掘調査においても検出例はある。この第4層「カシノミ層」と似た質感の土層が島原半島ではひろく見られる。百花台遺跡群ではAT降灰層である第6層である。第4層「カシノミ層」ほど硬質ではないが、硬くブロック状になり、農作物の育成には適していない。この第6層は島原半島北側から南東側の地域に広く見られるようである。ここで注目したいのは、長崎県布津町大崎鼻遺跡（土橋2001）の調査成果である。大崎鼻遺跡は島原半島の南東側、有明海に面して切り立った崖上に位置し標高は13mを測る。縄文時代早期の遺物が中心に検出されている遺跡である。自然科学分野によれば第5層においてAT火成灰が検出されているが、報告ではこの層が通称「カシノミ層」とされている。百花台遺跡群の「カシノミ層」とは明らかに異なる。国見町での調査の中で、百花台遺跡群の第4層「カシノミ層」と第6層（AT降灰層）が重層関係で検出されないケースもある。この場合一見しただけでは第4層なのか第6層なのか判断できない場合が多い。これまでの百花台遺跡群の多くの調査報告によれば、第4層「カシノミ層」と第6層（AT降灰層）は概ね重層関係で検出されており、第4層が「カシノミ層」と認識されている。しかしながら、どちらか一方が欠落している場合は、地元の方々にすればどちらでも「カシノミ層」と呼んでいるのであろう。布津町大崎鼻遺跡でも地元では第5層（AT検出層）が「カシノミ層」と呼ばれており、それをそのまま我々が調査の際にも使用してしまうのが現実であろう。先述したが百花台遺跡群での「カシノミ層」は、雲仙起源「輝石原火砕流堆積物」で年代測定値も公表されている指標となる「鍵層」である。また、島原半島南東地区大崎鼻遺跡周辺で「カシノミ層」と呼んでいる土層は広城テフラATを含んだ同じく「鍵層」である。しかしながら現状では2枚の異なる土層を同じように「カシノミ層」と呼んでいる場合もある。今後島原半島の旧石器時代調査が進むにつれこの2枚の「鍵層」はますます重要度を増すのは確実であろう。混同を避けるため「カシノミ層」との記載は今後十分に注意・検討する必要がある。これまで漠然と「カシノミ層」と言及してきたことを反省したい。

### 参考文献

- 麻生 優・白石浩之1976「百花台遺跡」「日本の旧石器文化」3 雄山閣  
江本 直1984『曲野遺跡II』熊本県文化財調査報告 第65集 熊本県教育委員会  
小畠弘巳1997「AT下位出土の台形様石器」「旧石器考古学」55 旧石器文化談話会  
遠部 慎・長岡信治・杉山信二・早田 勉・井上 弦2003『妙見床』長崎県南串山町文化財調査報告書 第5集 長崎県南串山町教育委員会  
川道 寛編2004「第I部 百花台遺跡群」「地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書I」長崎県文化財調査報告書 第176集 長崎県教育委員会  
田川 肇・副島和明・町田利幸・伴耕一郎1988「百花台広城公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」長崎県文化財調査報告書 第92集 長崎県教育委員会  
田川 肇編1994「県道国見兄雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」長崎県文化財調査報告書 第116集 長崎県教育委員会  
辻田直人・竹中哲朗2003「石原遺跡・矢房遺跡」国見町文化財調査報告書（概報）第3集 長崎県国見町教育委員会  
辻田直人・竹中哲朗2004「十園遺跡」国見町文化財調査報告書（概報）第4集 長崎県国見町教育委員会  
辻田直人2002「桜尾遺跡」国見町文化財調査報告書（概報）第2集 長崎県国見町教育委員会  
土橋啓介・渡邊康行2001「大崎鼻遺跡」布津町文化財調査報告書 第1集 長崎県布津町教育委員会  
長岡信治・田島俊彦1998「雲仙火山北麓の稗田原遺跡のテフラ層序」「稗田原遺跡II」（村川逸郎他）長崎県文化財調査報告書 第145集 長崎県教育委員会  
萩原博文1995「第2章 平戸の旧石器時代」「平戸市史 自然・考古編」平戸市  
藤野次史・中村真理2004「広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書II」一ががら地区的調査－広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室  
古門雅高編2001「東鷹野遺跡」有明町文化財調査報告書 第13集 長崎県有明町教育委員会  
松藤和人編1994「百花台東遺跡」同志社大学文学部考古学調査報告 第8冊 同志社大学文学部文化学科  
村崎孝宏1999「耳切遺跡」熊本県文化財調査報告 第180集 熊本県教育委員会



2003年春 石原遺跡

# 図 版



有明海へ



遺跡上空写真（昭和35年度国土地理院）

図版 2



12区調査風景（南より）



12区調査風景（左側が土黒西川）



12区m調査風景（第VI b層）



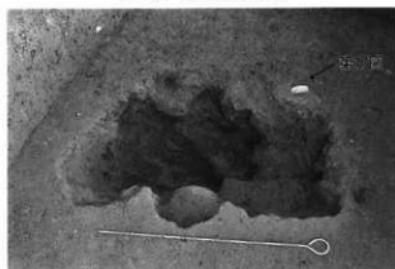
12区 k 北西隅石器（第15図49）



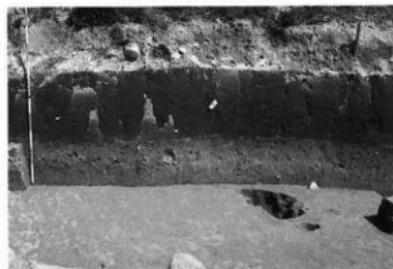
12区 h・SK01検出状況



12区 h・SK01半裁状況



12区 h・SK01完掘状況



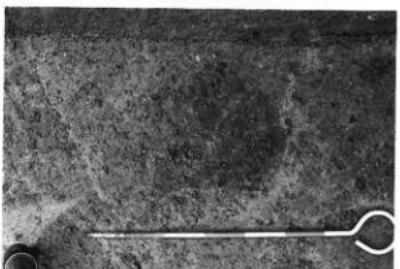
12区 h・SK01完掘と東側土層



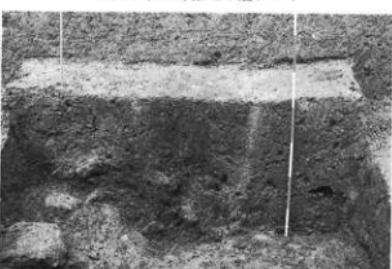
12区 I (エル)第VI f層P-1



12区 I (エル)第VI f層P-1



12区 I (エル)第VI f層P-1



12区 I (エル)第VI f層P-1半裁



12区 I (エル)第VI f層P-1完掘



12区 I (エル)第VI f層P-1と東側土層



12区 m第VI c層礫群 (北より: 第12図アミなし)



12区 m第VI c層礫群 (南より: 第12図アミなし)

図版 4



12区m第VI c層遺物（第12図アミかけ）



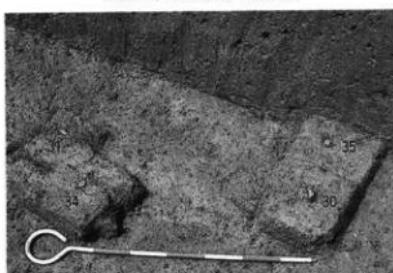
12区m第VI b層遺物



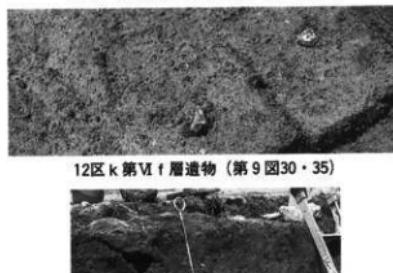
12区I(エル)第VI d層遺物



12区I(エル)第VI d層遺物（第11図36）



12区k第VI f層遺物（第9図）



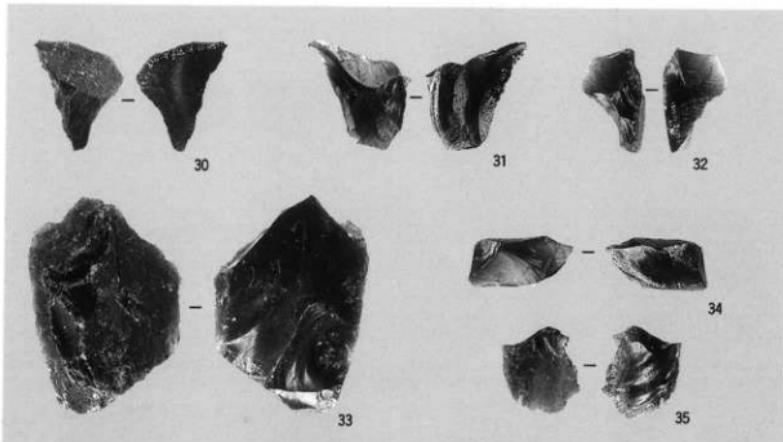
12区k第VI f層遺物（第9図30・35）



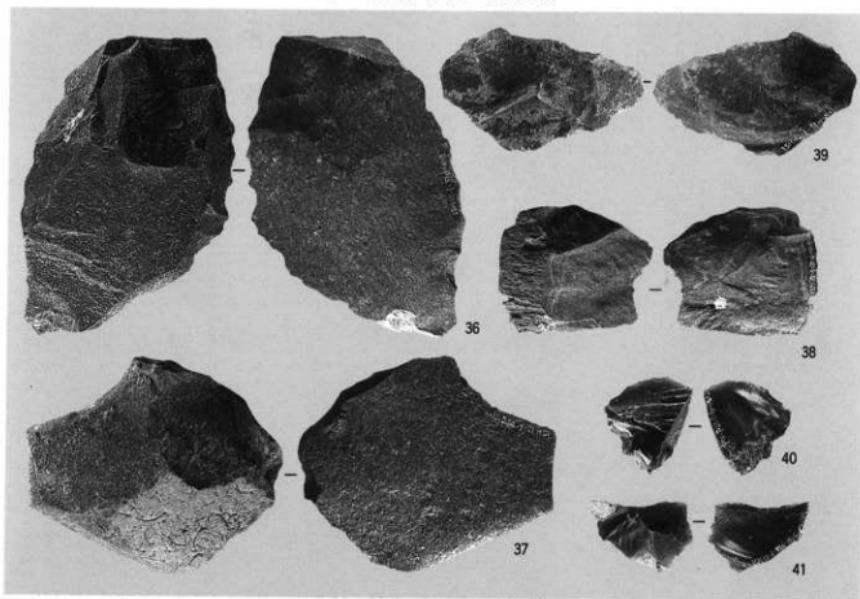
12区j完掘状況



12区k第VI f層遺物と西側土層

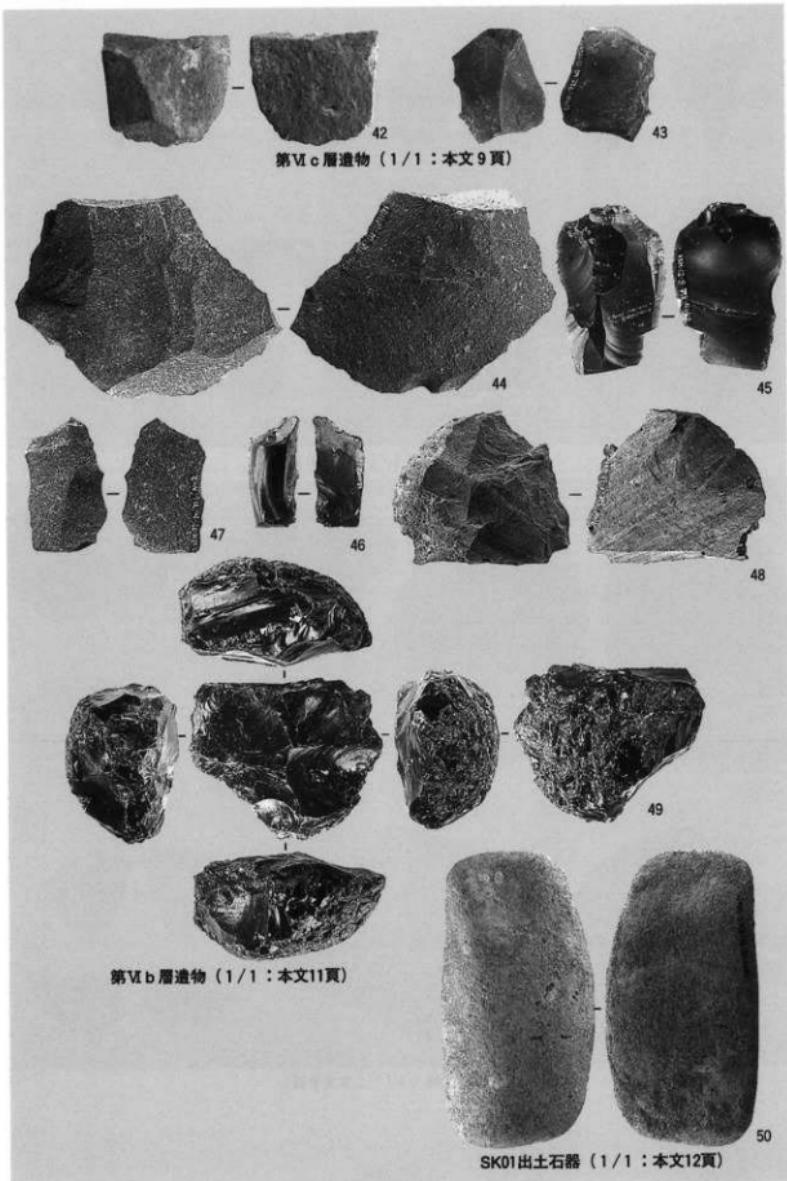


第VI f層遺物 (1/1 : 本文 6 頁)



第VI d層遺物 (1/1 : 本文 8 頁)

図版 6



## 報告書抄録

国見町文化財調査報告書(概報) 第6集

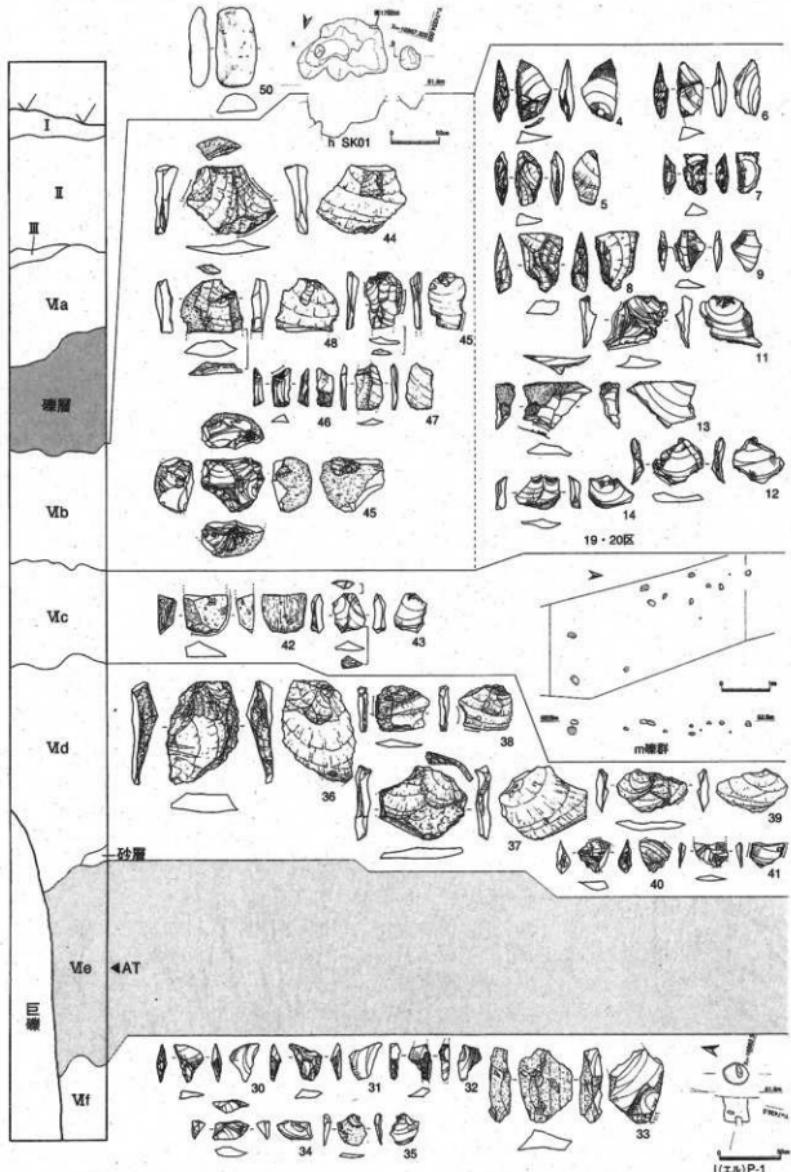
## 石原遺跡Ⅱ

2005

発行 国見町教育委員会  
長崎県南高来郡国見町土黒甲1079  
TEL 0957-78-1100

印刷 株式会社 昭和堂  
諫早市長野町1007-2  
TEL 0957-22-6000





石原遺跡19・20区及び12区の旧石器時代(石器1/3)※50のみ1/3の80%

(エヌ)P-1